

沖縄島南部地方の古井戸

角 田 清 美*

はじめに

琉球(沖縄)地方は、本土部とは異なった固有の文化を培ってきた。日々の生活に欠かすことが出来ない、上水を得るための井戸についても、名称については勿論のこと、井戸を設置する場所や構造も、本土とは異なっている。

名称についてみると、井戸は“がー”あるいは“かー”と称し、場所によっては、“じゃー”・“はー”・“なー”などとも称される¹⁾。

ひと口に「井戸^{がー}」と言っても、設置されている場所や、構造の違いによる名称は様々である。湧水場所を中心に、石垣で囲んだ井戸は囲い込み井戸^{がー}だが、その中でも、湧水場所を数m掘り下げ、湧水を溜まり易くした井戸は掘り下げ井戸^{がー}、あるいは穴井戸^{がー}である。平坦地に縦穴を掘り下げ、不圧地下水を得る筒井戸は掘り抜き井戸^{がー}で、井戸水を釣瓶を使って汲み上げる井戸は、釣井戸^{つんがー}と称される。釣瓶と言っても桶やブリキ製バケツは貴重であるため、古くはタバの葉を用い、巧に半球状の形に作っていた。タバの葉は植物であるため10日間程度で使えなくなるため、また新しく作っていたと云う。深さ4～5 m以上の井戸で、井戸壁を石垣で積み上げられた井戸は積井戸^{ちんがー}と称する。

*専修大学文学部兼任講師

地表面に大きな縦穴を掘り、地下水面まで階段を通過して下りて行く井戸、あるいは急崖の下に位置するため、階段を使って降りて行く井戸は降り井戸である²⁾。

琉球列島には石灰岩地区が広いため、鍾乳洞内やドリーネなどの溶食地形が多く、薄暗い場所が水場になっている場所もあり、そのような井戸は暗井戸と称する。一方、明るい砂浜にある井戸は浜井戸である。

湧水地（泉）は湧水量が多い泉は大湧であるが、水場として利用される場合は湧井戸、あるいは大湧井戸である。湧水量がさらに多い水場は、川の水が多い状況に似せて大川、あるいは大樋川と称されている。

利用や集落との関係から付けられた名称もある。集落の誰でもが利用できる共同井戸は村井戸、個人の敷地内にある井戸は屋敷井戸である。集落の発生と共に、古くから存在している井戸は親井戸、あるいは親川と称され、家屋の増加などによって利用者が増えたため、新しく設けられた井戸は新井戸と呼ばれる。新井戸に対して古井戸、あるいは元井戸と称している地区もある。発見伝説を持っている井戸は語り井戸、鳩が発見したという伝説を持つ井戸は鳩井戸、犬の場合は犬井戸、あるいは犬名井戸と称される。二つの井戸が並んでいると、夫婦に例えて夫婦井戸である。主として洗濯の場であった井戸は洗濯井戸である。

産水を汲むための井戸は産井戸あるいは産川で、その水は産水である。水は“ミジ”と読む。死人を沐浴させる時に使用する水は逆水で、お盆で霊を迎えるために使用する水は精霊水である。

集落と井戸の位置関係を基にした呼称も多い。集落の入口近くにある井戸は前井戸、あるいは前又井戸と称され、一方、背後にある井戸は後又井戸である。集落の中央付近にある井戸は真中井戸で、東側にある井戸は東井戸、西側にある井戸は西井戸である。あるいは、子の方の井戸・申の方の井戸・寅の方の井戸のように、集落の中心からの方向に基づいて名付けられた井戸もある。

宗教との関わりで名付けられた井戸も多い。住民たちから高く崇められている井戸は、^{うかー}御川・^{うかー}御井、あるいは^{うぶかー}御母川と呼ばれ、^{のろ}祝女が祈祷などで使用する井戸は^{ぬーる}祝女井戸である。禊の時に水を汲む井戸は^{そーじがー}禊井戸、あるいは^{そーじがー}精進井戸と称される。

古くから、^{かーわうが}川拝みは新年の最初の行事である。地下から清浄な水が湧出するのは、水・泉の神が宿っておられるからである。このこともあり、湧出地の近くには^{うがん}拝所を設置し、あるいはお香を焚くための^{うこーる}お香炉を設ける。水・泉の神は^{かー}井戸の^{かむ}神である。井戸の神は女性である場合が多い。清浄な水は命を支える聖水である。現在の命は、御祖先から引き継がれた命で、聖水で支えられて来た。このような考えのためか、家庭内で紛争があった場合、神女に同席してもらい、井戸の前で意見を述べ合うこともある（写真-1）。神女は霊的能力を得ているので、御祖先からの意思を同席者に伝えるのであろう。信仰心が強い人（家庭）では定期的に^{かー}井戸の^{かむ}神を拝む



写真-1 井戸前での話し合い

アミ戸で保護された井戸の前に神女が席を取り、その後夫婦が並んで座っている。神女が井戸神に礼拝をした後、神女はそれぞれから意見を聞き、神に伺いを立てる。その後夫婦に神の意向を述べ、問題を解決する。

習慣が続けられ、あるいは、旅行に出かける時や旅行先から帰宅した場合などでも、井戸の神を拝む習慣が、一部では残っている。さらに、結婚する女性が嫁ぐとき、それまで使用していた井戸水を器に入れ、婚姻先の井戸に注ぐ家庭もあったと云う。台所を預かる女性たちは、霊力の源泉を聖水に求めて、井戸(川)に求めて川拜み(川御願, “かーめー”, “うびなでい”とも言う)の儀礼を、機会がある度に行った。現地調査を行っていると、拝所に新しいお供え物があり、あるいはお香炉には線香を焚いた、新しい跡を度々見掛けた。

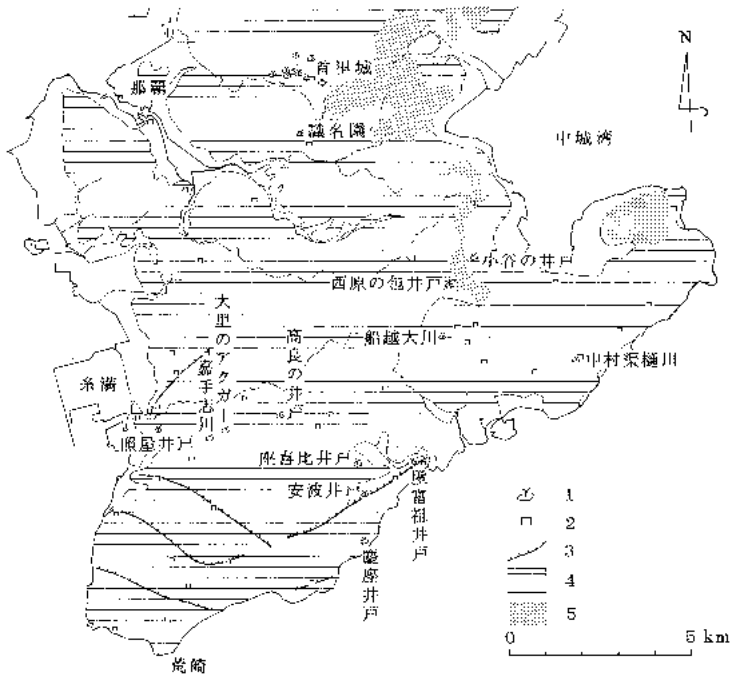


図1 沖縄島南部地方の地形と古井戸

1. 調査を行なった古井戸 2. グスク 3. 活断層 4. 洪積台地 5. 丘陵地
グスクについては、藤本・ほか(1980)を参考とした。

段丘崖下などから湧出する不圧地下水を、石造りの樋を通して利用できるようにになっている井戸は樋川井戸ひーじゃーがーで、略して樋川とも称する³⁾。丘陵地や台地で高い位置にある井戸は上ヌ井戸うい かーであるが、湧出口に樋が設けられている井戸は上ヌ樋川井戸うい ひーじゃーがー（略して、上ヌ樋川）である。同様に、相対的に低い位置にある井戸は下ヌ井戸しむ かー（下ヌ樋川）しちや ひーじゃーである。

水質に基づいて名称が付けられた井戸もある。海岸付近で、淡水が湧き出る井戸は甘水井戸あまみ がー、汽水が湧き出る井戸は中水井戸なかみ がー、塩水が湧き出る井戸は塩水井戸すーみ がー、それぞれの井戸水は甘水あまみじい、中水なかみじい、塩水すーみじいと言う。

大和文化圏では井戸・泉・湧水・井戸水と単純な表現であるが、琉球（沖縄）文化圏では、上記のように、構造・位置・新旧・利用などを手掛かりとして、井戸には様々な名称が付けられている。このことは、生活に欠かすことが出来ない井戸水を、聖霊が宿っていると考えるほど大切にし、一方では親しみを持って接していたことを示している。

本報文では、沖縄島南部地方にある多くの古井戸の中で、一般的な形態をした筒井戸ではなく、特異な形態をしている古井戸を選び（図1）、井戸付近の地形と地質、井戸の形態、さらに古井戸にまつわる伝承などを記載した。

なお、本報文は、筆者の古井戸に関する一連の報告（角田，1993・1994・1996a・1996b・1998・2001a・2001b・2002a・2002b・2013・2014a・2014b）に続く報告である。

1. 小谷の井戸おこく がー

(1) 所在地

城南市佐敷町小谷

(2) 井戸付近の地形と地質

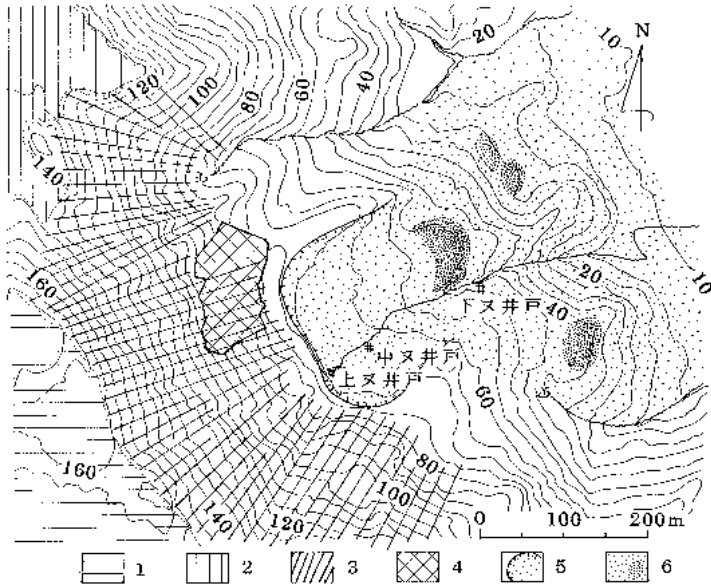


図2 小谷の井戸付近の地形

1. 150～170m段丘面 2. 130～140m段丘面 3. 地滑り滑落崖 4. 人工
 改変地 5. 小規模な地滑り滑落崖 6. 地滑り堆 図内の細線は等高線で、
 数字の単位はm。

小谷の井戸の西側には、比高60～80mの急崖が延びているが、この急傾
 斜面は侵食斜面ではなく、地滑り性の滑落崖である(図2)。滑落崖の下
 には、数か所に地滑り堆が乗る緩斜面が分布し、さらに下位にも小規模な
 滑落崖が分布している。地滑り堆が乗る平坦地には三か所に村井戸があり、
 それぞれ上ヌ井戸・中ヌ井戸・下ヌ井戸と称される。

上ヌ井戸は小谷子の井とも称され、かつては産井戸や村井戸として、集
 落内では重要であったと云う。伝承によると、この井戸は今から約150年
 前、現在の形に改造された(長嶺, 1992)。

上ヌ井戸から直線で約50m離れた場所にある中ヌ井戸は、上ヌ井戸から
 流れ下る水路に沿って位置し、明治時代後期に造られたと云う。中ヌ井戸

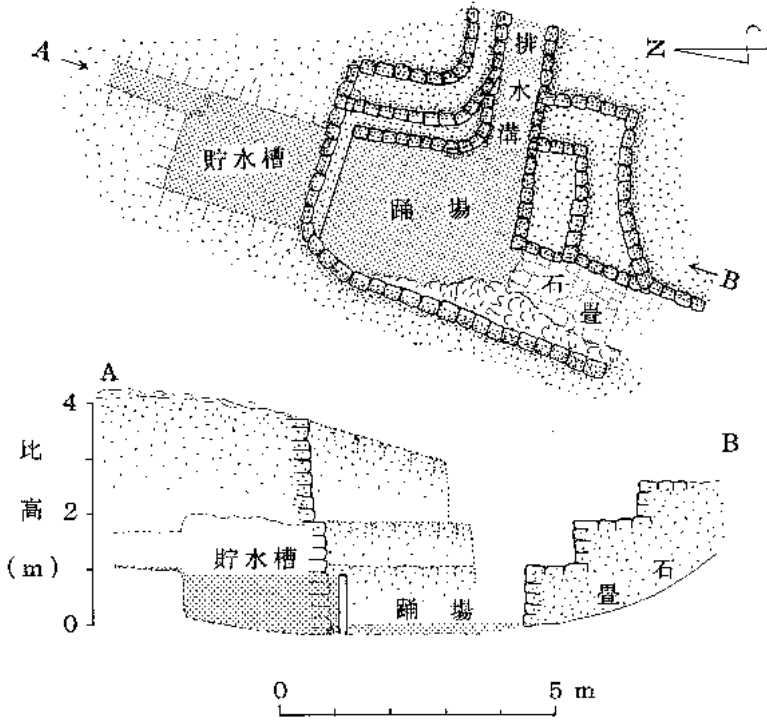


図3 「小谷の上ヌ井戸」の形態
井戸の位置は図2を参照。A-Bは断面の位置。

の入口はアーチ型の石積みで、高さ約2m、幅約3m、奥行き約2.5mの規模である。水路の脇で井戸場の前面には、一辺が約2m、深さ約40cmの貯水槽がある。かつてはこの周辺で、洗濯をしたり農作物を洗ったりしたと云う。

下ヌ井戸は、中ヌ井戸から直線で約150m離れた下流にある。上ヌ井戸から流れ下る小川の右岸に位置し、地下水が湧出している場所を中心に、穴井戸としている。井戸の奥行きは約1mで、左右側面と後方は雑石の二段積みしんざととなっている。付近の地質は、泥岩層の新里層である。三つの井戸

の中では最古と伝えられ、知念按司が設置したと伝えられる。

(3) 上ヌ井戸の形態

平面形は正方形で、地下室の部分と地表面の踊場の部分から構成され、その間には、高さ約90cmでコンクリート製の仕切りが設けられている(図3)。地下室の部分は、右奥にある幅約50cmの水路から流れ出る地下水を溜める貯水槽で、幅約2m、奥行き約3mの広さである。天井は切石で覆われている。

踊場の部分は幅約2m、奥行き約3.4mの広さである。右手側は三段で、比高約3.7mの石垣が築かれている。地下室の貯水槽から溢れ出た地下水は、一時、踊場に溜まった後、幅約70cmの排水溝から流れ出るようになっている。近くの石段の上には、水神を祀る拝所うがんが設けられ、中にはお香炉うごーるが備えられている。

2. 西原にしはらの包井戸ちぢんがー

(1) 所在地

南城市大里西原おおざとにしはら

(2) 井戸付近の地形と地質

付近の地形は数段の海岸段丘で、それらは標高148~160mの上位面、140~145mの中位面、130~132mの下位面に区分される(図4)。上位面より下位に分布する段丘面は、上位の段丘面を開析する谷を埋めるような状態で分布することから、下位の段丘面は相対的な海水面の低下に伴って形成されたのであろう。包井戸は中位面の中央付近で、大里おおざとグスク跡の入口付近に位置する降り井戸うがーである。

付近の地質は、シルト岩である新里層しんざとが広く分布し、その上位に琉球石灰岩層が堆積している。

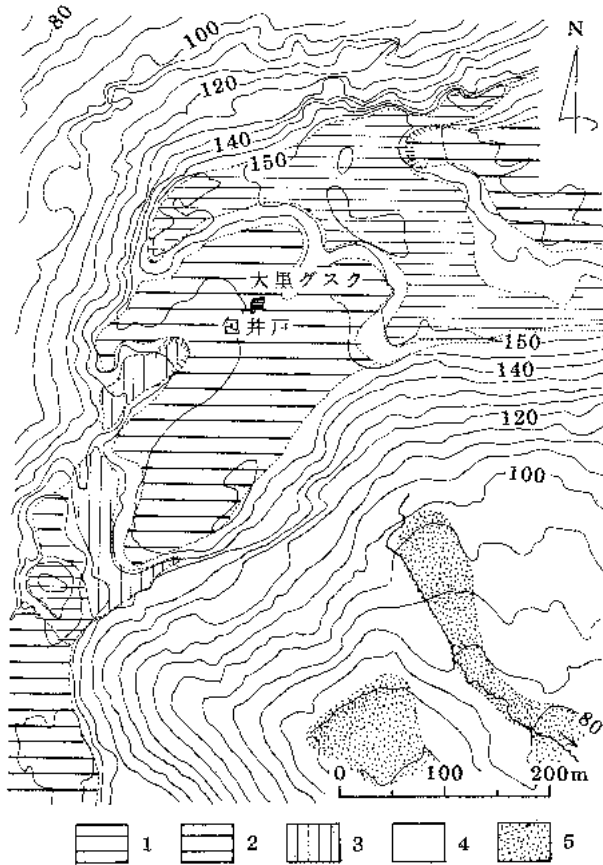


図4 西原の包井戸付近の地形

1. 上位面 2. 中位面 3. 下位面 4. 段丘崖 5. 氾濫低地 図内の細線は等高線で、主曲線は5m間隔。(単位:m)

(3) ^{ちぢんがー}包井戸の形態

平面形は隅丸の楕円形で、長径約16m、短径約14mの広さである(図5)。大きな凹地の周辺には、落下や崩落を防ぐため石垣が築かれ、また井戸底へ向かう石段の両側にも石垣が組まれている。地表面から井戸底にある踊

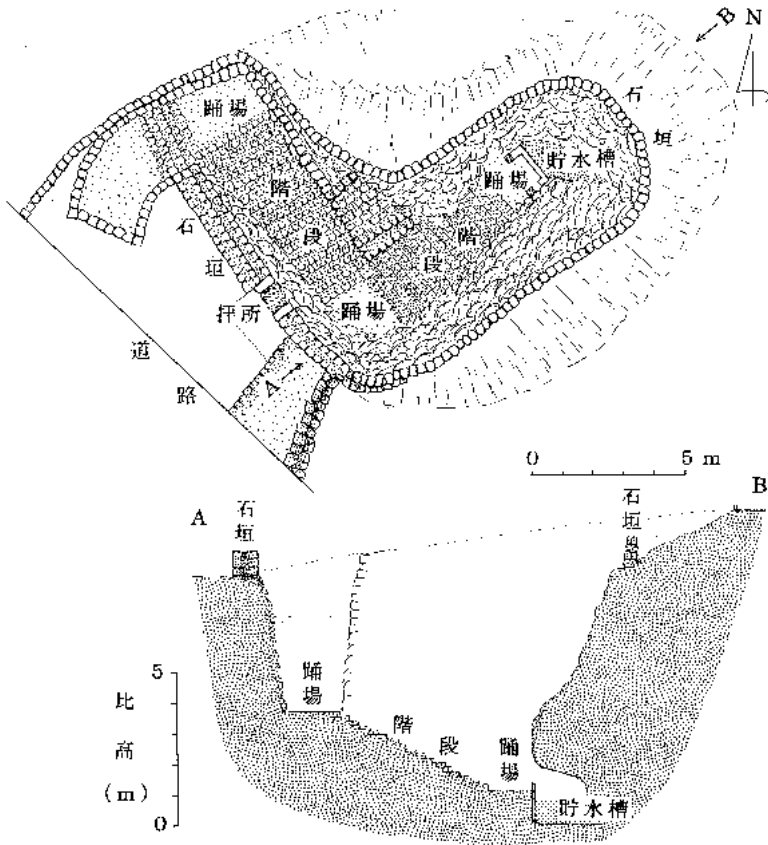


図5 「西原の包井戸」の形態

井戸の位置は図2を参照。A-Bは断面の位置。

場までの深さは約7mで、鍵型状をした小道があり、43段の石段となっている。踊場は幅約1.4m、奥行き約1.7mの広さで、現在はコンクリート張りになっている。踊場の奥には奥行き約1.5m、深さ約0.5mの貯水槽がある。井戸底のシルト岩層が難透水層で、上位の琉球石灰岩層が滞水層となっており、また貯水槽からの排水口がないこと、あるいは井戸底付近に生

育する植生などから、増水時には踊場も水没すると考えられる。

地表面から貯水槽を見下ろす位置に、石造りの屋根を持つ幅約80cm、高さ約50cm、奥行き約75cmの^{うがん}拜所が設けられ、その前にはお香炉が置かれている。

(4) その他

この井戸は、沖縄島にある多くの古井戸の中で、代表的な^{うがー}降り井戸である。大里^{おおざと}グスクは14世紀頃に築かれたと推定されることから、この井戸は城内の兵士たちの喉を潤すため、あるいは城内へ避難して来た人々のために、築城と共に掘削されたと考えられる。井戸の近くには説明板が立てられ、下記の文章が書かれている。

「 チ ゼ ン ガ ー 」

チゼンガーは、大里城跡の城門近くの城壁外に設けられた降り井形態の井戸で、西原集落の村の共同井戸として使用されていた。築造年代は定かではないが、大里城跡との関係から14世紀頃と推定される。

井戸の湧水地点は地表から8メートル下にあり、取水池までは琉球石灰岩の岩盤を削って43段の石段が取り付けられている。取水池の岩盤部分は琉球石灰岩の面取り積み石垣が積まれており、大里城跡の城壁の一部ともみなされている。

伝承によれば、井戸が城壁外にあると清水が湧き出し、城内に取り込まれると水が枯れたとのことである。また城内のスクヤマヌウカー（御井）が枯れたので築造したとの伝えもある。

チゼンガーは、大里城跡と密接に関わっているばかりでなく、当時の城と井戸との関係を理解する上でも貴重である。

平成3年3月25日

大里村教育委員会」

3. 船越大川^{ふなこしうっかー}

(1) 所在地

南城市船越

(2) 井戸付近の地形と地質

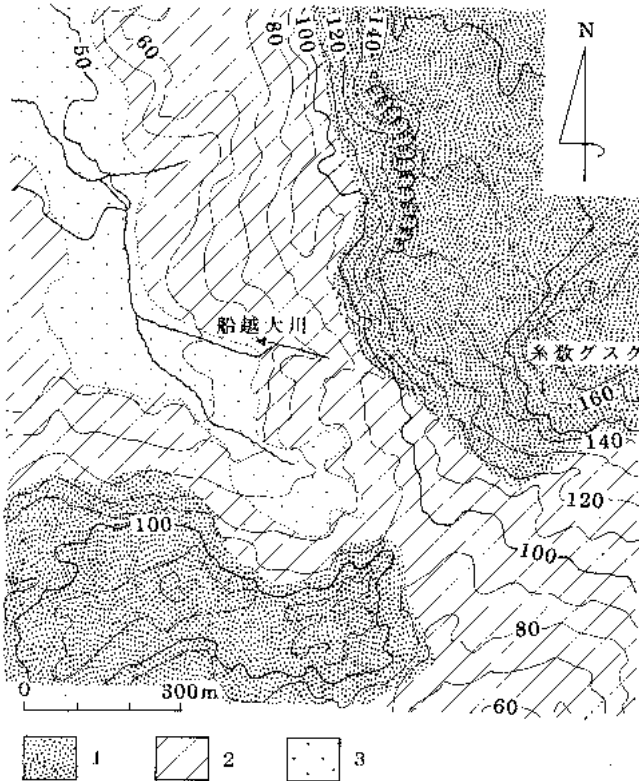


図6 「船越大川」付近の地形

1. 石灰岩台地 2. 台地周辺斜面 3. 谷底低地 図内の細線は等高線で、主曲線は10m間隔。(単位：m)

大川の東側と南側には、標高100~200mの台地が広がり、台地の周囲は急斜面となっているが、その下位には緩斜面が広がり、大川は遷緩点の麓に位置している（図6）。上位の急傾斜地区の地質は琉球石灰岩層で、キャップロック状に島尻層群を覆っている。下位の緩傾斜地区の地質は主として砂層である島尻層群で、琉球石灰岩が部分的に点在している。緩傾斜地区では各所で地下水が湧出し、小さな流れとなって雄樋川に流れ下っている。

(3) 井戸の形態

船越大川は、島尻層群と琉球石灰岩層の不整合面から流れ出る地下水を、

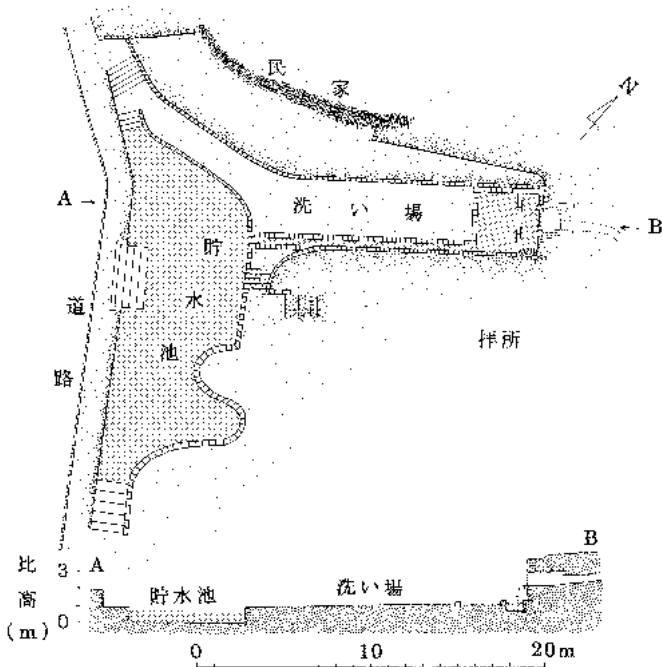


図7 「船越大川」の形態

大川的位置は図6を参照。A-Bは断面の位置。

横穴を穿って地下水が流出しやすいような構造になっており、地下水路・貯水槽・洗い場・貯水池から構成されている（図7）。二本の樋川の奥部は、図に示されているように、鍵状に繋がっており、その奥は幅約0.5m、延長3m以上のトンネルになっている。

高さ約0.5mの^{ひージャー}樋川の下にある貯水槽は二槽からなり、いずれも幅約3.3mで、奥部は深さ約0.5m、奥行き約1m、手前側は深さ約0.1m、奥行き約2.2mの規模である。樋川から流れ出た井戸水は二槽の貯水槽に溜められた後、延長約13m、幅約0.3mの貯水槽から貯水池へ流れ出るが、排水溝の脇には幅約3mの洗い場が設けられている。排水溝や洗い場の両側は、合方積みの立派な石垣である。排水溝の下流にある貯水池は、延長約20m、幅1.5～7mの広さで、深さは0.5m前後である。県道に面する側は直線状であるが、対岸は水面に美しく映えるように曲線になっている。貯水池では、かつては馬などの家畜を洗い、あるいは暑い日には、子供たちが水浴をして遊んだという、往時の状況を書いた説明板が立てられている。

（4）その他

糸数集落は、標高140m前後のキャップロック状の台地の上に広がり、その南東側には集落より約50m高い台地上に糸数城跡が残っている。糸数城は三山分立の初期である14世紀前半に築かれたと伝えられる。

井戸への入口には、旧沖縄市教育委員会によって説明板が立てられ、下記の記事が書かれている。

「 ヒー ジャー ガー

沖縄市指定文化財

指定月日：1994年4月22日

ヒージャーガー（樋川井戸）はいつ頃造られたか定かでない。地元明治20年代生まれの古老によると、物心ついた幼年の頃にはあったと言う。これから推定して、作られた年代はおよそ100年前になる。美里の人々は、昔は子供が誕生した時に産湯を汲んだ。ウブ

ガー（産井戸）として信仰され、ウチマー行事の際にも村の頭達が拝んでいた。

昭和初期までは、住民の飲用水として用いられ、また洗濯場として毎日賑わっていた。さらにヒージャーガーの水は、下流では水田の稲苗床の水として再利用されていた。 」

4. 中村渠樋川

(1) 所在地

なかなだかり
南城市中村渠

(2) 井戸付近の地形と地質

沖縄島の南東端付近は、大別して標高120～150mの上位面と、標高40～80mの中位面からなり、その間に、数段の小さな段丘面が分布し、海岸付近には沖積低地が分布している（図8）。これらの段丘面の地質は、下位に島尻層群が分布し、その上位には不整合関係で、厚い琉球石灰岩が堆積している。不整合面からは、各所で地下水が湧出している。

なかなだかり
中村渠樋川は段丘崖の中腹より少し低い場所に位置し、標高は95～96mである。島尻層群と琉球石灰岩の不整合面を、直接観察することはできないが、付近の段丘崖に傾斜遷緩点が分布していることから、遷緩点付近に不整合面があり、そこから地下水が湧出しているであろう。

(3) 井戸の形態

ひーじゃー
樋川は、段丘崖を北側へ20～30m掘り込んだ状態で築かれ、背後にある急崖の比高は約4mである（図9）。地下水は北西端から湧出し、延長約6mの水路を経て、急崖に沿って設けられた幅約10m、奥行き約2m、高さ約2mの貯水槽に流れ込んでいる。貯水槽の前面には幅約10m、奥行き約3mの洗い場があり、貯水槽からは四本の樋川から、水が流れ落ちて

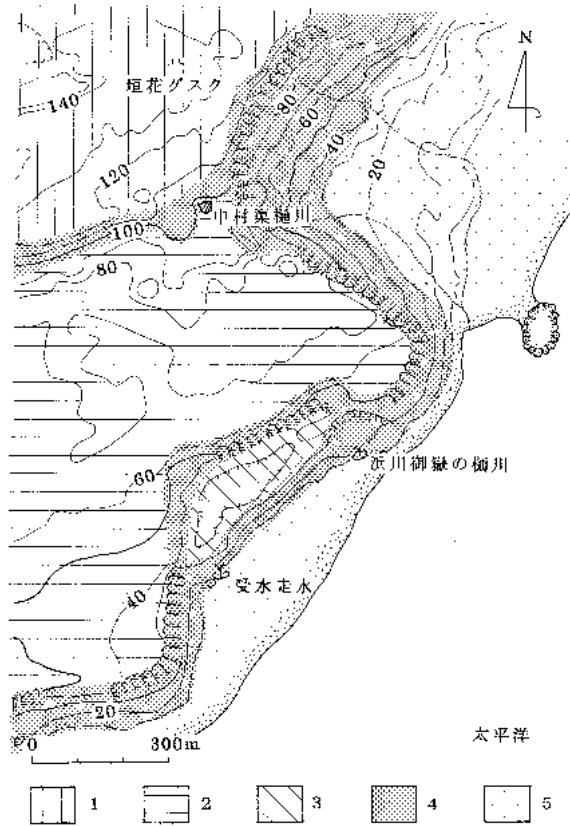


図8 「中村渠樋川」付近の地形

1. 上位面 2. 中位面 3. 下位面 4. 段丘崖 5. 海岸低地 図内の細線は等高線で、主曲線は10m間隔。(単位：m)

いる。踊場からは四段の階段で昇降する。踊場の面積は約65m²で、南端にはカジマロの巨樹が植栽されている。貯水槽や洗い場の東端には、貯水槽と考えられる構造物が二槽、その脇には半円形の窯跡^{ヒージャー}があるが、樋川との直接的な関係はない様である。近年、この場所で多数の人々が煮炊きなどをした際、築かれたのであろうか。

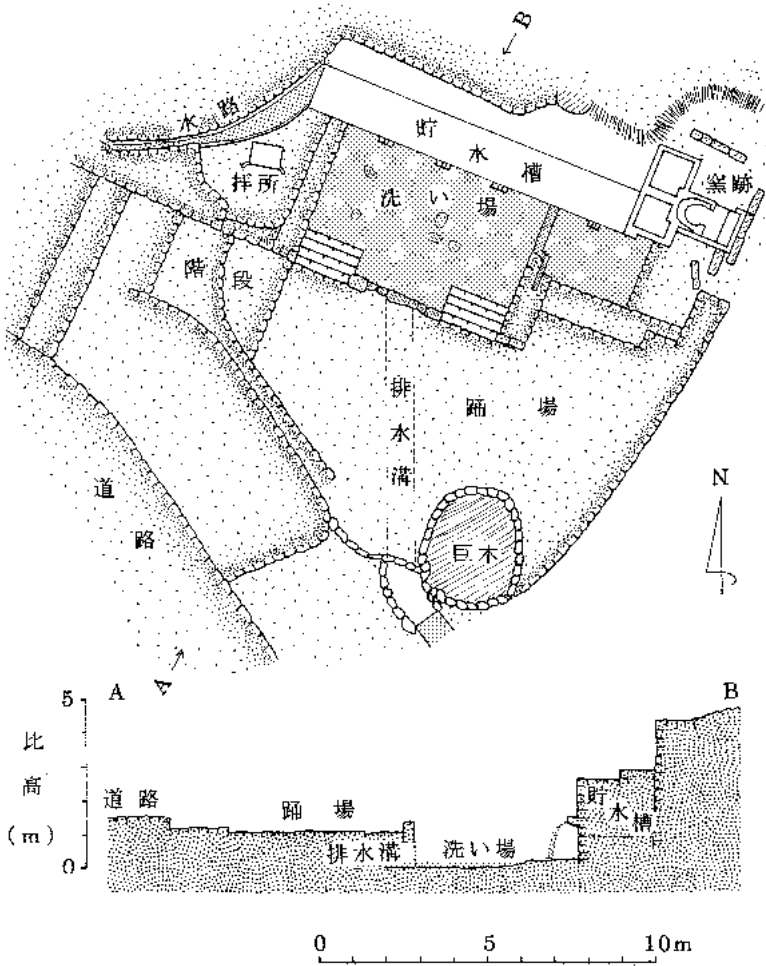


図9 「中村渠樋川」の形態

樋川の位置は図6を参照。A-Bは断面図の位置。

湧水地点と貯水槽の間で、平坦地の上には拌所^{うがん}が置かれている。

(4) その他

なかんだかりひーじゃー^{なかんだかりひーじゃー} 中村渠樋川の背後で、標高120~150m上位段丘面近くには垣花集落^{かきのはな}が

位置し、その南東端に当たる段丘崖上には、三山時代に築かれた垣^{かきのはな}花グスク跡がある。一方、下位の段丘面上には百^{ひゃくな}名集落が位置している。当集落名の「村^{むらだかり}渠」は分村を意味し、両集落の発展に伴って人口が増加したため、両方の村の中間にあり、湧泉があったこの位置に分村が成立したのであろう。

百^{ひゃくな}名集落が位置している比高40m前後の段丘崖の下で、海岸付近には、受^{うきんず}水^{すい}走^{はいんず}水^{すい}や浜川御嶽の樋川と言った湧水がある（図8）。いずれも、古い伝説を持っている。

5. 具^ぐ志^し頭^{ちゃん}の屋^や富^ふ祖^そ井^が戸^ー

(1) 所在地

島尻郡八重瀬町具^ぐ志^し頭^{ちゃん}

(2) 井戸付近の地形と地質

屋^や富^ふ祖^そ井^が戸^ーは、具^ぐ志^し頭^{ちゃん}グスク跡の北側から南西方向へ延びる、断層崖下に位置している。断層崖下を北東方向へ流れる白^{しろ}水^{みず}川^{がわ}の両岸には、幅150～200mの狭長な氾濫低地が分布し、屋^や富^ふ祖^そ井^が戸^ー付近より下流では断層崖下には、標高45m前後の段丘面が分布している（図10）。

付近の地質は、基盤として泥岩層の^{しんざと}新里層があり、その上位を糸数石灰岩層が覆っている。屋^や富^ふ祖^そ井^が戸^ーは段丘崖下で、新里層と糸数石灰岩層の不整合面から湧出する地下水を集めるような構造になっている。排水溝付近の地形が大きく改変されているため、白水川までの排水路は確認できない。

(3) 屋^や富^ふ祖^そ井^が戸^ーの形態

平面形は楕円形で、長径約10m、短径約7mの規模である（図11）。井^が戸^ーへ行くには北西端に入口があり、そこから階段を下る。地下水の湧出口は西端にあり、幅約1.5mである。一方、排水口は貯水池の北東端にあり、

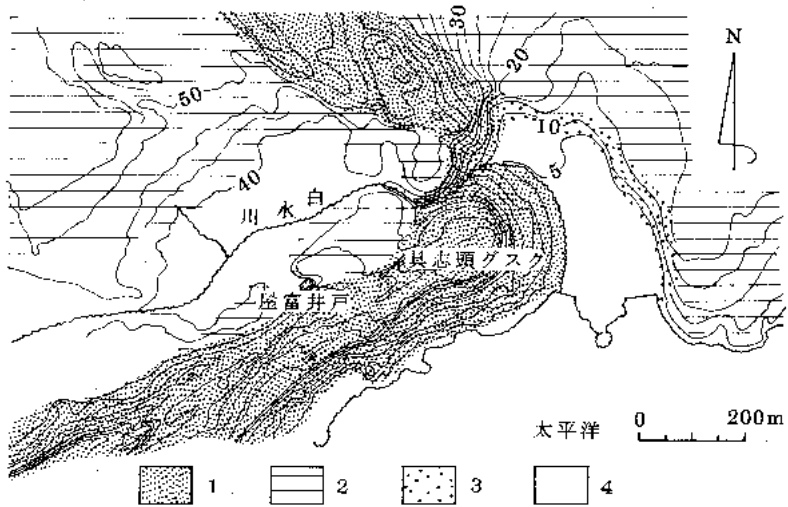


図10 「具志頭の屋富祖井戸」付近の地形

1. 丘陵地 2. 段丘面 3. 段丘崖 4. 氾濫低地 図内の細線は等高線で、主曲線は5m間隔。(単位：m)

幅約2mの広さである。最深部は中央付近で、深さは約60cmである。貯水池を中心に、西側と中央部にはコンクリート製の洗い場が設けられている。周囲には、三段で比高約2.9mの石垣が築かれている。湧水口の上位には、水神を祀る拝所が設けられ、お香炉が置かれている。

(4) その他

井戸の名称の由来は、^{やふそ}屋富祖と言う家で飼っていた犬が発見した井戸に由来すると云う(福島, 1987)。この^{やふそがこ}屋富祖井戸も、沖縄の石造り文化を代表する立派な^{がこ}井戸のひとつで、旧具志頭村教育委員会によって、井戸への入口には説明板が立てられ、下記の文章が書かれている。

「^{やふそがこ}屋富祖井戸

屋富祖井について次のような伝説がある。

昔、大旱魃に会い具志上村、屋富祖村の人々は飲料水の確保に苦

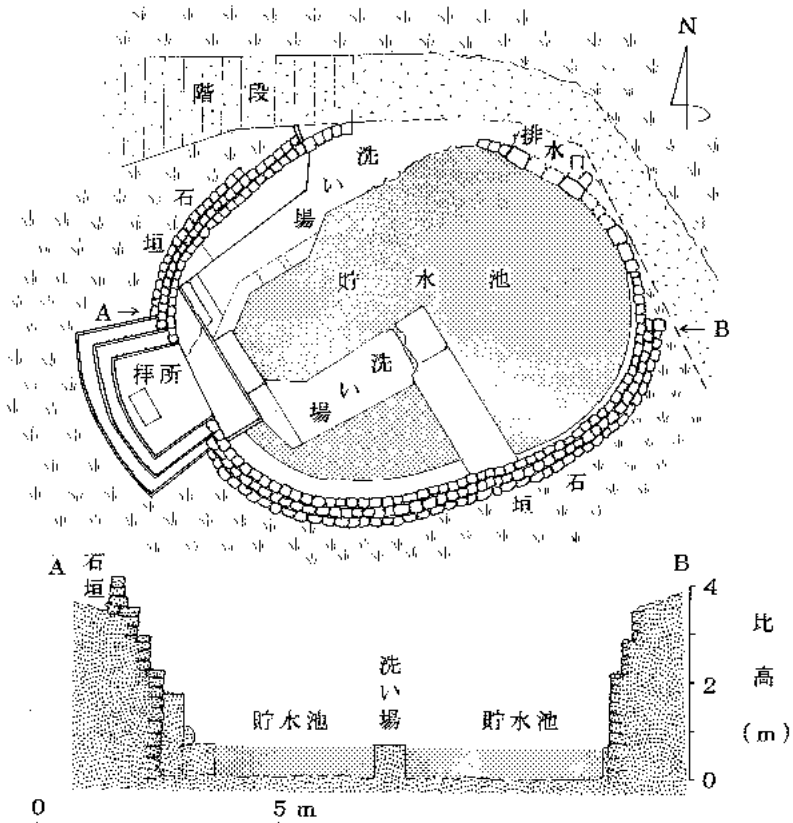


図11 「具志頭の屋富祖井戸」の形態
位置は図10を参照。A-Bは断面の位置。

しんでいた。ところでたまたま、屋富祖犬がずぶ濡れになって山中より出てくるのを人々は見つけ、こんな早魃に田野に水のあるわけではないが、どこで浴びたのだらうと不審に思い、ある日、その犬が、山中にわけて行く後ろを追うた。すると、果せるかな清水がこんこんと泉があった。人々は大いに喜び、その周囲の山を切り開き設備を施し通路を設けた。そして、ここより水を汲むようになり、

以後いかなる早魃にも飲料水に苦しむことはなかったと言う。そして、その犬が屋富祖家の所有するのであることにちなんで屋富祖井と呼ぶようになった。

屋富祖井は、いつか発音が変わって屋^や富^ふ井^が戸^ーと呼ばれるようになった。

屋富祖井戸に、現在のような水汲場、洗濯場、家畜浴場等の設備がなされたのは、大正8（1919）年であり、大正12（1923）年には摂政宮殿下の御成婚を記念して石碑が建設された。

屋富祖村は、近世琉球時代の初期に、具志頭村に合併して村はなくなった。』

6. 安^あ里^{さと}の座^ざ嘉^{かん}比^が井^ー戸

(1) 所在地

島尻郡八重瀬町安里

(2) 井戸付近の地形と地質

座^ざ嘉^{かん}比^が井^ー戸は台地の北部近くに位置し、井戸から溢れ出た水は、小川となって北東方向へ流れ、浅い谷を作りながら低地に落ちている（図12）。台地の西側には標高100～120mの丘陵地が広がり、東側は低地となっている。井戸が位置している段丘面は、南東方に向かって緩やかに傾斜しているため、低地との比高は北側で約25mであるが、南側では2.5m程度に過ぎない。この勾配是那覇石灰岩が堆積した当時を示しているであろう。

丘陵地や台地を作っているのは新里層（シルト岩）で、その上位に更新世の琉球石灰岩層の部層である、那覇石灰岩層が覆っている。低地では新里層上に、薄く沖積層が堆積している。

(3) 座^ざ嘉^{かん}比^が井^ー戸の形態

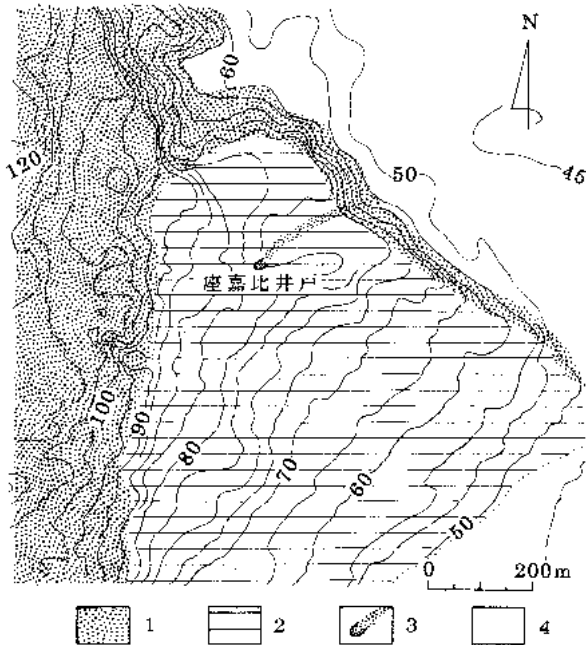


図12 「安里の座嘉比井戸」 付近の地形

1. 丘陵地及び段丘崖 2. 段丘面 3. 段丘面上の浅い谷 4. 氾濫低地
図内の細線は等高線で、主曲線は5m間隔。(単位：m)

井戸は浅い谷の谷頭部を、コンクリート製の仕切りで堰止めて設けられ、平面形は馬蹄形である(図13)。周囲は切石を用いた、三段の合方積みの石垣である。コンクリート製の仕切りは延長約4m、貯水槽の奥行きは約3.2mで、深さは約2mである。

近くの農道から井戸の前にある遊水池までは、幅約2.5mの小道が続き、入口の近くには牛馬の手綱を繋ぐ石柱がある。かつては、遊水池の水で家畜の体を洗ったり、水を飲ませたりしたのであろう。

一方、井戸の奥部には、幅約30cm、高さ約30cmで、お香炉を設置するための空間がある。そこから、約3m下位にある湧出口から、地下水が湧き

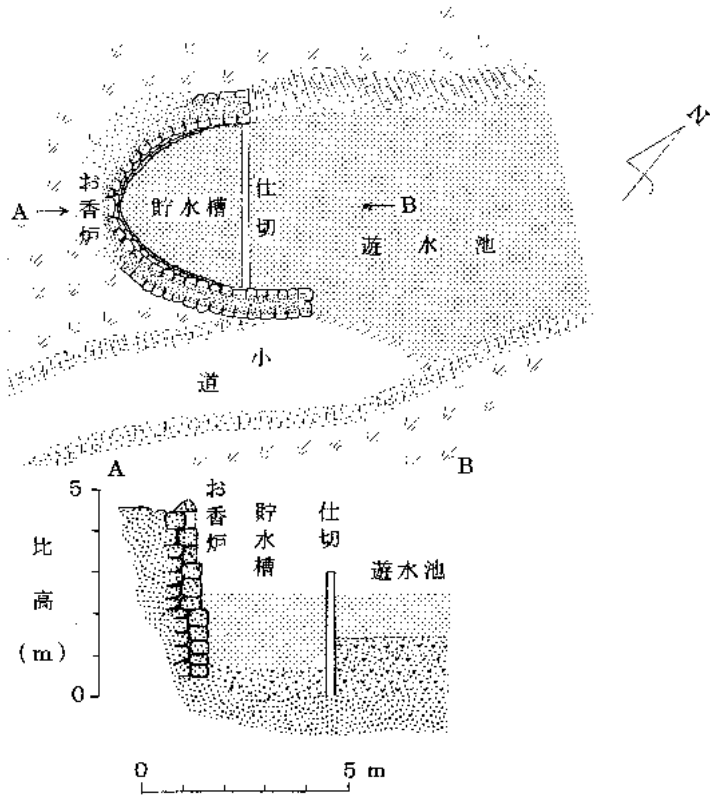


図13 「安里の座嘉比井戸」の形態
井戸の位置は図10を参照。A-Bは断面の位置。

出る構造になっている。

(4) その他

安里^{あさと}集落の成立時代は17～18世紀と考えられていることから、福島(1987)は井戸もその頃に築かれたと推定している。近くに建てられている説明板には、最近では1993年6月に修理した旨が述べられている。

7. 与座の安波井戸

(1) 所在地

島尻郡八重瀬町与座

(2) 井戸付近の地形と地質

安波井戸は、屋富祖井戸から南西方向へ断層崖に沿って約1.6km離れた位置にあり（図1）、井戸の近くでは、北東から南西方向へ直線状に、比高20~30mの断層崖が延びている（図14）。断層崖上には丘陵地が延び、安波井戸と屋富祖井戸の間には、14世紀初期に築かれた上城グスク跡が残っている。断層崖の北側には、白水川の両岸に幅約150mの氾濫低地がある。

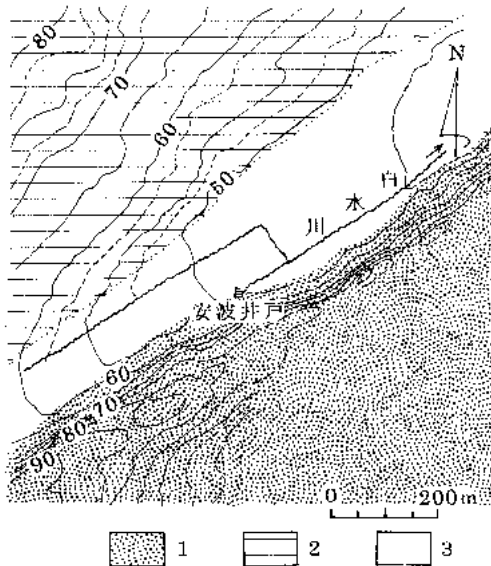


図14 「与座の安波井戸」付近の地形

1. 丘陵地 2. 段丘面 3. 氾濫低地 図内の細線は等高線で、主曲線は10m間隔。(単位:m)

広がり、さらに北方には座嘉比井戸が位置する段丘面が広がっている。

付近の地質は座嘉比井戸と同様、基盤としてシルト岩（新里層）があり、その上位を那覇石灰岩層が覆っている。地下水は断層崖で、両層の間の不整合から湧出している。安波井戸と座嘉比井戸の間の距離は約850mである（図1）。

(3) 安波井戸の形態

平面は長方形で、幅約8.5m、奥行き約15mの規模である（図15）。氾濫低地を約1.5m掘り込んでいるのは、断層崖下の各所から湧出する地下水を、効率よく集められるようにしたためであろう。このため、井戸の周囲は石垣で囲まれている。崖下の不圧地下水が湧出する場所は、幅約7m、

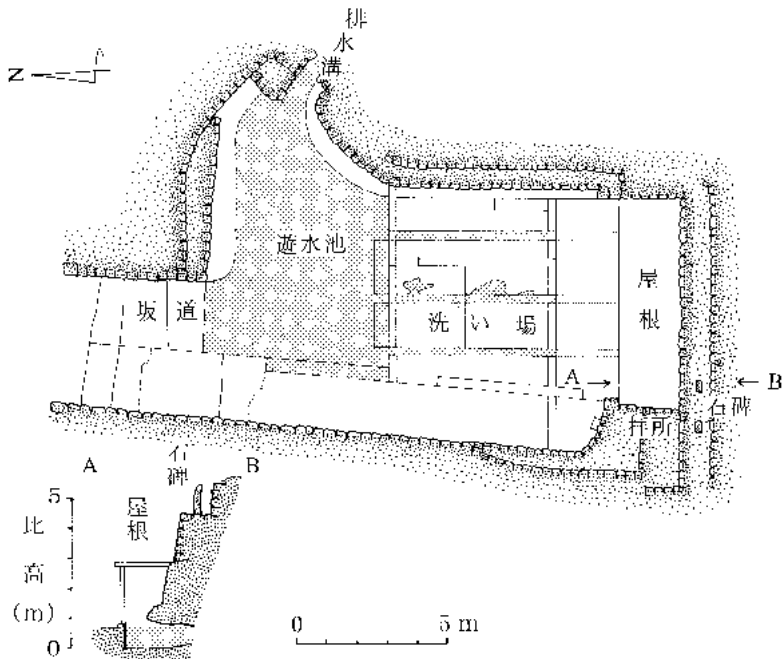


図15 「与座の安波井戸」の形態

井戸の位置は図14を参照。A-Bは断面の位置。

奥行き約2mで、コンクリート製の屋根で覆われている。その前面には、幅約6.5m、奥行き約8mのコンクリート張りの洗い場があり、幅25～30cmの排水溝が3本設けられている。さらに前面には、遊水池が設けられ、そこから溢れ出た水は、幅約1mの排水路しろみずがわを通して白水川へ流れ出る。一方、屋根に向かって右手には拜所とお香炉が設けられ、背後には二基の石碑が祀られている。

遊水池の幅は約7mで、コンクリート張りの洗い場も広いため、古くから村井戸として利用されたと考えられる。近年は、耕作地の灌漑用水源として利用されている。

(4) その他

安波井戸あふあがーは別名、世持川よもちがーとも称され、古くから利用されたと伝えられる。福島(1987)は『球陽』の記事に「本年(1827)、世持川より水道を決開し、且堤井三個を鑿設し、永く村落の益と為る」とあることから、この時、何らかの形で井戸が設けられたと考えている。しかしながら、近くに14世紀初期の上城跡うえぐすくが位置していることから、上城が築かれた頃には、何らかの形で湧水は、すでに利用されていたのかも知れない。

8. 慶座ぎーざの慶座井戸ぎーざがー

(1) 所在地

島尻郡八重瀬町慶座ぎーざ

(2) 井戸付近の地形と地質

慶座井戸ぎーざがーは、摩文仁まぶんの丘にある平和記念公園から北東方向へ、直線で約1km離れた位置で、比高約40mの段丘崖近くに設けられている(図16)。安波井戸あふあがーの南方で、北東-南西方向へ延びる断層崖の南側は、南方へ傾斜する標高40～80mの海岸段丘面で、泥岩～砂岩層の新里層を糸数石灰岩層

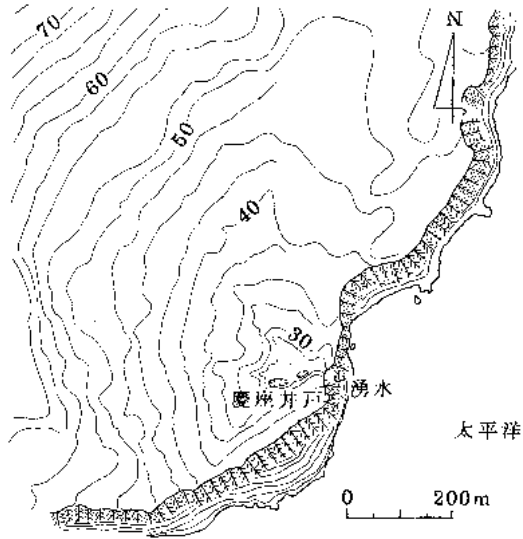


図16 「慶座の慶座井戸」付近の地形

図内の細線は等高線で、主曲線は5m間隔。(単位：m)

が覆っている。海岸に面する段丘崖に沿う糸数石灰岩層の層厚は8m前後で、新里層との不整合面からは、地下水が音を立てて湧出している。

(3) 慶座井戸の形態

井戸は地表から水が流れ込まないように、高さ約1mの土塁で取り囲まれ、平面形は北東-南西方向に細長い楕円形である(図17)。土塁の長径は約15m、短径は最大約10mで、その中に、三段の石垣に囲まれた、平面形がへら状をした降り井戸である。石垣はすべて、石灰岩を加工した切石を、不整形な石を巧みに組み合わせた合方積みで築かれている。握りの部分に当たる延長約30mの階段は、幅約1m、27段である。階段を降りた先は台形に似た平坦地になっており、縦約3.3mで、階段に続く底辺の幅は約2mである。地表面から底部までの深さは約8mである。井戸底の位置が、段丘崖にある地下水の湧出地点とほぼ同じ標高であることから、井戸を掘

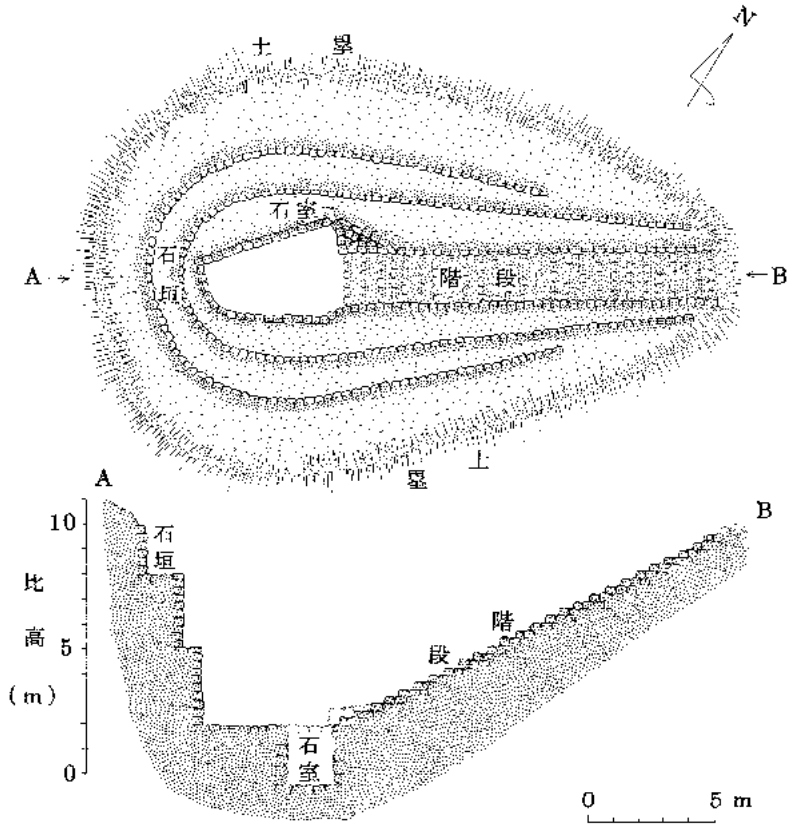


図17 「慶座の慶座井戸」の形態
井戸の位置は図16を参照。A-Bは断面の位置。

るに先立って、段丘崖で地表面から地下水湧出地点までの比高を測り、その結果を考慮して井戸を設けたと考えられる。さらに、底部の平坦地の右側で、床面の下には、一辺が約1 m、深さ約2 mの石室が設けられており、底は軟らかい泥で埋まっている。地下水の水位が下がったときは、石室に溜まっている水を汲んだと推定される。

(4) その他

井戸への入口近くには、旧具志頭村教育委員会によって説明板が立てられ、下記の文章が書かれている。

「 慶 座 井 (方言名ギーザガー)

安政年間(1854~1859)、具志頭間切では、首里王府の農村思索に基づき、広大で未開の慶座原を開拓して、そこに、新しい村の建設を図った。

ところで、慶座原は、琉球石灰岩丘陵部台地上に位置し、水利の便はきわめて悪く、飲料水・生活用水の確保が、開拓の先決問題であった。

ところが、近くの慶座バンダには、海に面した断崖の中腹から湧き出て、海に流れ落ちる水量きわめて豊富な滝(銀河という)その水脈を台地上で掘り当てるために、大規模なさく井工事によって落成した積井(チンガー)がこの慶井座である。それは、今よりおよそ135年前である。

慶井座は、尚家の御庭松山御殿(俗に桃原農園と言う)にある、佐司笠樋川の設計を模して成された。規模・形状は、上部で東西の長さ約15m、南北の長さ約15m、下部の直径約7.5m、深さ約9.5mの円錐形状を成している。

築造の技法は、佐司笠樋川と同様になっており、石積みは三段に積まれている。下部の一段目から二段目のテラスは狭く、二段目から三段目にかけてのテラスはかなり広い。三段目の上場の部分から周囲全部に土塁がめぐらされている。

具志頭村教育委員会」

9. 高良の上ヌ井戸

(1) 所在地

島尻郡八重瀬町高良

(2) 井戸付近の地形と地質

付近の地形は、東西に延びる比高15～30mの急斜面を境として、二段に分けられる(図18)。標高82～100mの上位面は、南から北方へ向って穏やかに傾斜し、小規模な三段に細区分される。下位面は標高55～72mで、上位面を開析する谷を埋めるような状態で分布することから、それぞれ、相

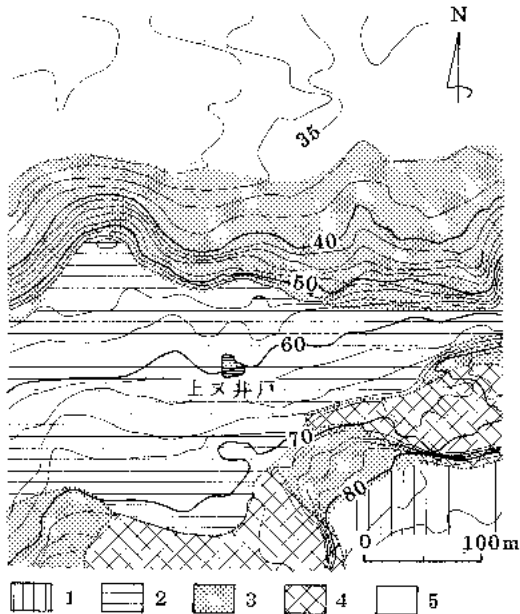


図18 「高良の上ヌ井戸」付近の地形

1. 上位面 2. 下位面 3. 段丘崖 4. 人工改変地(採石場) 5. 沖積低地 図内の細線は等高線で、主曲線は2m間隔。(単位:m)

対的な海水準の低下によって形成されたのであろう。

上ヌ井戸は下位面の上で、標高約60mの高さに位置している。付近の地質は、基盤として半固結のシルト岩である鮮新世の新里層が分布し、その上位を更新世の琉球石灰岩層の部層である糸数石灰岩層が覆い、段丘地形

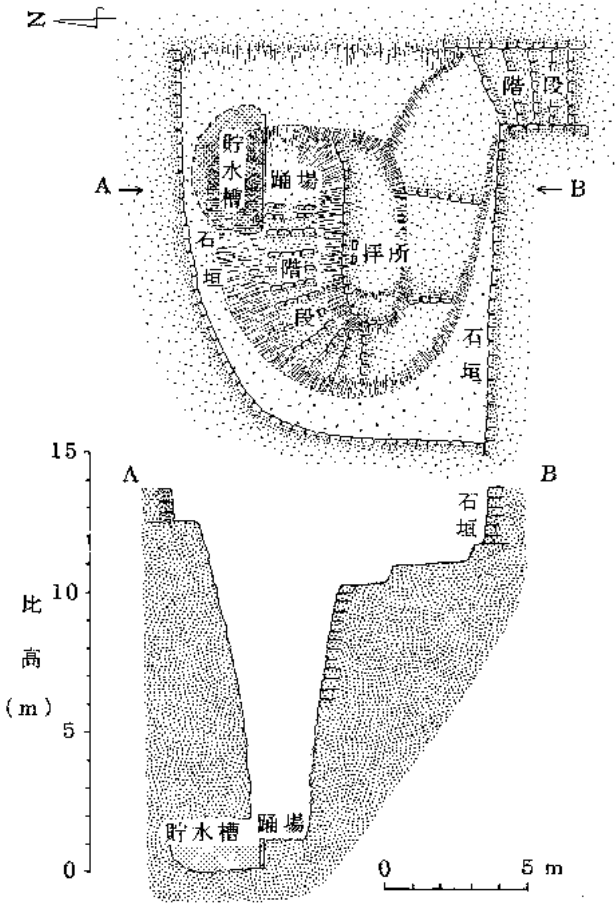


図19 「高良の上ヌ井戸」の形態

井戸の位置は図18を参照。A-Bは断面の位置。

を形成している。断層崖下の氾濫低地では、新里層上に薄い沖積層が堆積している。琉球石灰岩は良好な石材であるため、採石が容易な段丘崖では、石材として採掘されているため、大規模な人工改変地となっている。

(3) 上ヌ井戸の形態

平面形は東西約14m、南北約11mの、石垣で囲まれた正方形の敷地の中に、直径約10mで、いくぶん楕円形をした大きな窪地（井戸）を設けた降り井戸である（図19）。窪地内には、平面形がU字状になった石段が設けられ、貯水槽がある井戸底へ向う。石段の両側には崩落を防止するため、石垣が積まれている。付近の地表面から踊場までの深さは約12.5mで、地質についてみると、入口から比高約5m付近までは糸数石灰岩層で、それより下位は新里層である。地層が異なるため、石灰岩層の場所と新里層（シルト岩）の場所とでは、階段の構造が幾分異なっている。

踊場は半円状で、半径は約2mである。その奥には新里層（シルト岩）を掘り込んだ、奥行き約2.5m、幅約4.5mで、深さ約1mの貯水槽がある。排水溝が無いことから、豊水期には、踊場も水没するのであろう。地表面から貯水槽を見下ろす位置に、お香炉が置かれている。

10. 大里おおざとのアクガー

(1) 所在地

糸満市大里

(2) 井戸付近の地形と地質

井戸は、東から西方へ緩やかに傾斜した段丘面のほぼ中央に位置し、標高は約55mである（図20）。付近の表層地質は琉球石灰岩層で、地表面は石灰岩が風化した、赤褐色の鳥尻マーヅが広く覆っている。段丘面の北東縁には比高6～8mの石灰岩堤が延びている。

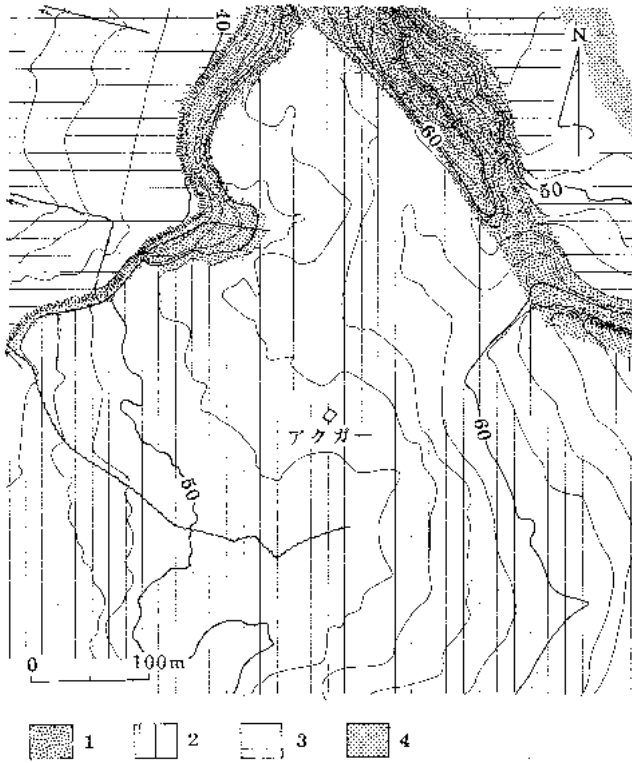


図20 「大里のアクガー」付近の地形

1. 石灰岩堤 2. 上位面 3. 下位面 4. 段丘崖 図内の細線は等高線で、主曲線は2m間隔。(単位：m)

(3) 井戸の形態

段丘面に穿たれた井戸は、ほぼ正方形で、貯水槽と洗い場に分けられる(図21)。地下水が湧出する貯水槽は、幅約2.3m、奥行き約1.7m、深さ約0.5mの規模である。貯水槽の周辺が崩壊しないよう、一段の石垣が配置され、また正面にはお香炉が置かれている。

洗い場は幅約3m、奥行き約4.2mの広さで、周囲の地表面から約1.3m

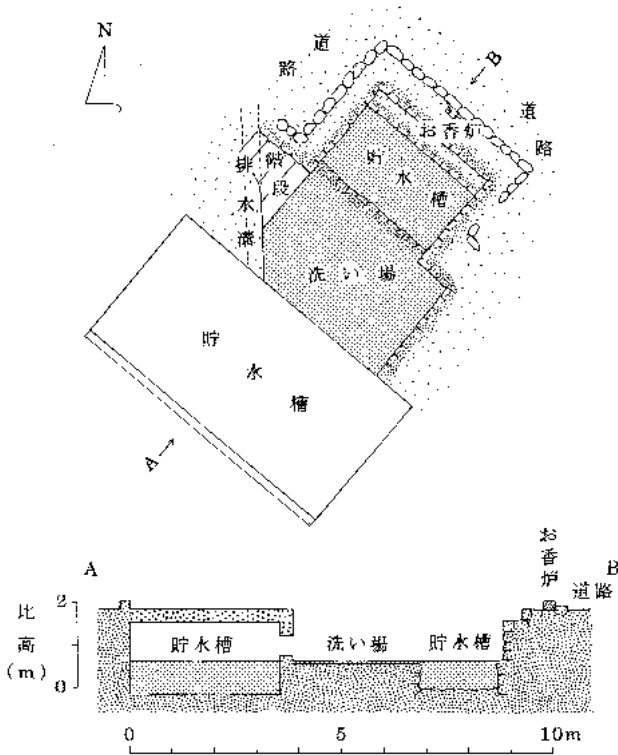


図21 「大里のアクガー」の形態

井戸の位置は図20を参照。A-Bは断面の位置。

低く、階段で昇降するようになっている。洗い場の脇には、コンクリート製の屋根で覆われた貯水槽があるが、この貯水槽は近年、設けられたようである。貯水槽から溢れ出た水は階段の下を通り、北方へ延びる排水溝へ流出している。

(4) その他

井戸の周囲は、どこでも見掛けるようなサトウキビ畑で、井戸の水を必要とするような場所ではない。このことから、井戸を中心として、かつ

て集落が存在したと考えられる。

11. 嘉手志川^{がでいしがー}

(1) 所在地

糸満市大里

(2) 井戸付近の地形と地質

嘉手志川^{がでいしがー}の南側には、北西から南東方向へ比高約10mの急崖が延び、その上位は、琉球石灰岩層からなる小起伏の地形が延びている。急崖を利用して、14世紀頃に構築されたと伝えられる南山グスク跡がある（図22）。

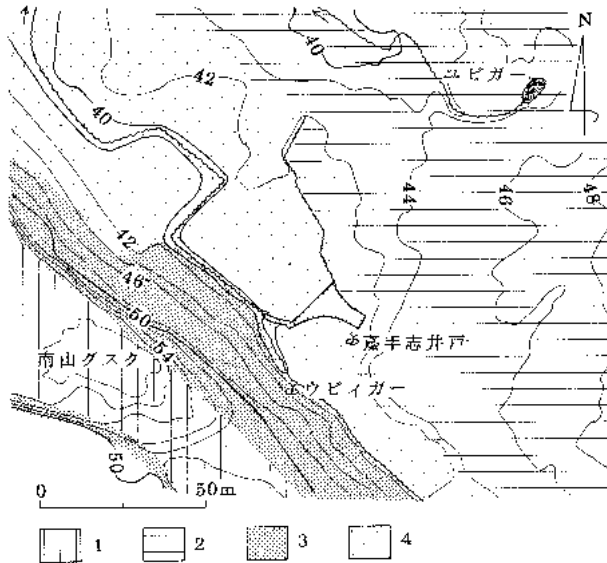


図22 「嘉手志川」付近の地形

1. 上位面 2. 下位面 3. 段丘崖 4. 氾濫低地 図内の細線は等高線で、主曲線は2m間隔。(単位:m)

崖下の平坦地は鳥尻層群である泥層～シルト層からなり、標高は40～48mである。急崖に沿っては狭長な低地が分布し、崖下には湧水地が多い。嘉手志川はその一つで、規模が最も大きい。井戸は東から西方へ緩やかに傾斜する段丘面の末端で、台地と低地が接する境界に湧出する地下水を、効果的に集める位置に設けられている。

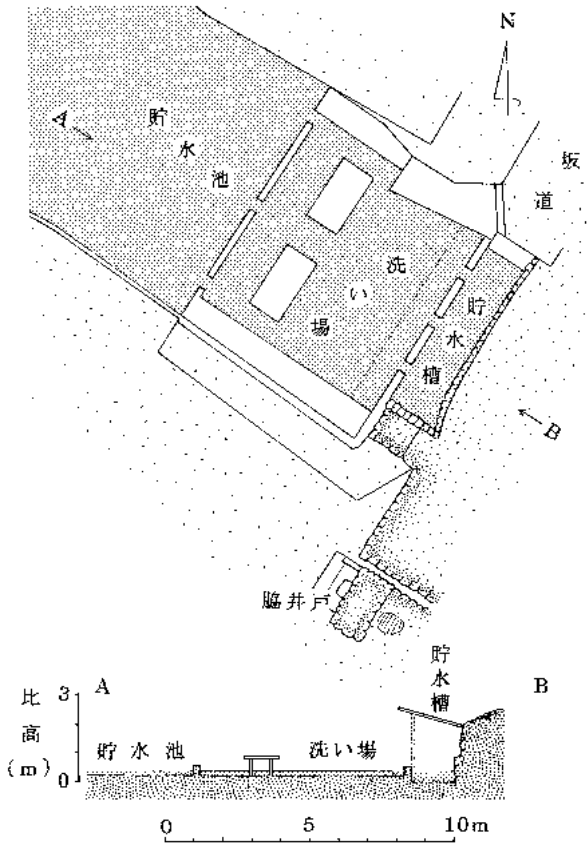


図23 「嘉手志川」の形態

井戸の位置は図20を参照。A-Bは断面の位置。

(3) 井戸^{がー}の形態

井戸^{がー}は段丘面の傾斜に直角に交わるような状態で設けられ、不圧地下水の湧出口には、延長約6m、幅約1.5m、深さ約0.35cmの貯水槽が設けられている(図23)。崖下の各所から地下水が湧出し、南東端からの湧出量が最も多い。貯水槽の前面には延長約7.5m、幅約7mの洗い場が広がり、その下流側は広大な貯水池となっている。洗い場の両側にもコンクリート製の踊場があり、また洗い場の中には二つのベンチが置かれている。さらにその下流側には、約800㎡の広さの貯水池となっている。

(4) その他

伝えられるところによると、この井戸^{がー}は大旱魃のとき、犬によって発見されたという。

嘉手志川^{がでいしがー}の南方で、約6m離れた位置には、一辺が約2mで、石垣に囲まれた囲い込み井戸がある。さらに、南西方向へ約60m離れた位置にも「ウビイガー」と称される囲い込み井戸がある。この井戸は長径約1m、短径約1mの大きさの楕円形で、地表面から井水面へは五段の石段を降りるようになっている。付近では、各所に湧水場所があるのであろう。

12. 照屋井戸^{てるやがー}

(1) 所在地

糸満市^{てるや}照屋

(2) 井戸付近の地形と地質

照屋集落は標高60mの丘頂から南方へ、緩やかに傾斜する琉球石灰岩層からなる段丘面上に位置する。照屋井戸^{てるやがー}は段丘面の末端で、地下水が豊富に湧出する場所を掘り込んで設けられている(図24)。直接観察することは出来ないが、井戸^{がー}が位置する標高8~10m付近に、下位の島尻層群があ

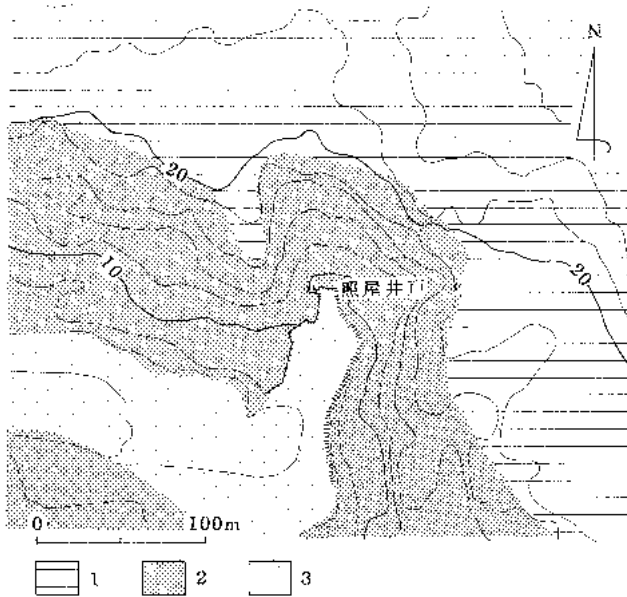


図24 「照屋井戸」付近の地形

1. 段丘面 2. 段丘崖 3. 氾濫低地 図内の細線は等高線で、主曲線は2m間隔。(単位：m)

り、地下水は不整合面から湧出しているのであろう。

(3) 井戸の形態

井戸は段丘面の傾斜に直角に交わるような状態で、延長約7.5m、幅約4.5mの貯水槽が設けられ、深さは約1.5mである(図25)。背後にある段丘面より約5.5m低く、貯水槽の背面は三段の石垣が組み、その中央にお香炉が置かれている。不圧地下水は貯水槽の壁面に築かれた石垣の間から湧出しているが、東端からの湧出量が最も多い。貯水槽の前面は、幅約10m、奥行き約15mの洗い場で、その下流側には、新しく、幅約4.7m、奥行き約9mの貯水槽が設けられている。

地下水の涵養源になっている段丘面上は草地で、草地の中央には巨木が

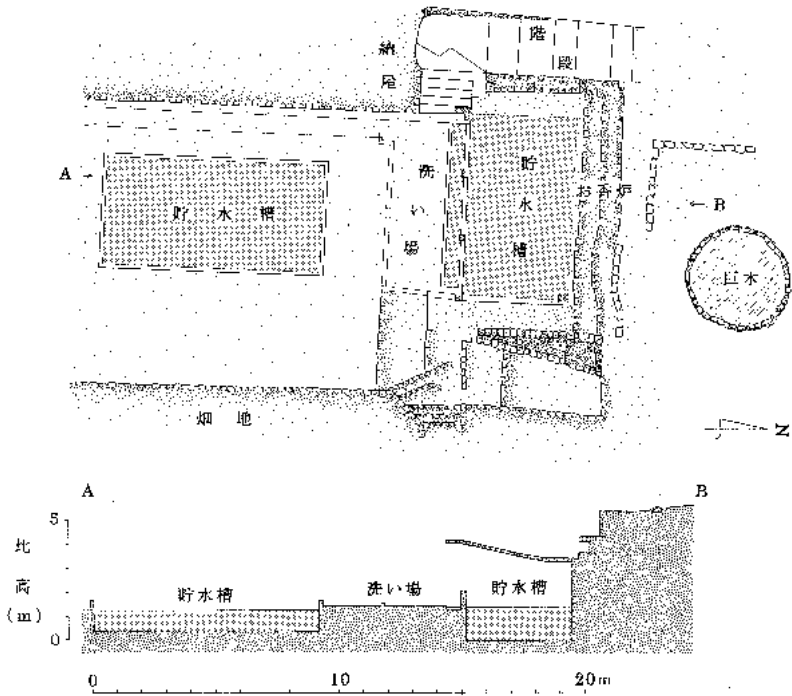


図25 「照屋井戸」の形態

井戸の位置は図24を参照。A-Bは断面の位置。

植栽されている。段丘面からは井戸に向かって、井戸の両側から階段で下りられるようになっている。

まとめに代えて

沖縄地方に分布する多くの井戸の中から、本報告を含め47の古井戸を記載した(角田, 2013・2014a・2014b)が、特徴的な構造をした井戸に主眼を置き、筒井戸(積井戸)は除外した。それぞれの古井戸の、地形や地質

と湧水の関係・形態・設置や利用の歴史、あるいは現況などについて記載した。

報告した古井戸が位置している場所を中心に分類すると、(1) 段丘(断層)崖の中腹付近に位置している井戸、(2) 段丘(断層)崖下で、氾濫低地との境界付近に位置している井戸、(3) 河川の谷頭付近に位置している井戸、(4) 段丘面上に位置している井戸、に分けられる。

大和文化圏と大きく異なるのは、湧水状況ではなく、湧水箇所や井戸周辺の構造である。湧水箇所は不圧地下水が大量に湧出した場合や、古くなって湧出口が崩落しないよう、切石を布積み、あるいは合方積みと称される巧みな方法で、石垣が設置されている。桃原の佐司笠御井・識名園の育徳泉・真志喜の森の川、あるいは中村渠樋川のように、沖縄に伝わる石造り文化を代表する井戸もある。また、湧出地の前面には大きな貯水槽を設け、貯水槽から流れ出る水を、一度に多くの人たちが利用できるような工夫がなされている。さらに、貯水槽の前には広い石畳の洗い場や踊場となっている。洗い場や踊場と、土層からなる周囲の斜面とは、石垣で明瞭に区画されている場合が多いため、結果として、水場に出現しやすい毒蛇のハブを発見しやすい構造になっている。さらに、井戸の一面には拝所とお香炉が備えられ、水に対する信仰心の一端が伺える。井戸は単なる水場ではない。琉球地方の石積み文化・利用者の使い易さ、さらに宗教心などを全て表す施設である。

一方、上水道の普及によって、井戸水の大切さや水に対する信仰心が希薄になっているのも、現実である。不圧地下水の涵養源になっている場所に、住宅地が設置され、あるいは大規模な道路が開通したため、地下水の湧出量が少なくなった井戸もある。井戸が単なる大きな窪地と考えられるようになった井戸の中には、ゴミ捨て場にされてしまい、見捨てられた場所もある。地下水が生命を繋ぐ聖水として崇められていた往時の状況から考えると、隔世の感である。

井戸^{がー}は、自然からの恵みである聖水が湧出する場所で、地域で生活してきた人々の生命を維持してきた、貴重な文化財施設である。井戸を通じて地域の歴史を知り、これからの地域の歴史を創るため、井戸とその周辺を整備して保存し、後世へ継承することが大事だと考える。

- 1) そのため、井戸ではなく、「井」と書いても“かー”あるいは“がー”とも、「泉」も“かー”あるいは“がー”と称するため、井戸を「井泉」と表記している図書や論文もある。一般的な川は「かーら」あるいは「はいかー」と呼び、井戸と区別する。水が流れる小川（沢）は井戸ではないが、水が得られる場所であることから井戸の範疇に含む地区もあり、ここでは井戸と同じ名称で“かー”あるいは“がー”と称する。溜池は“くむい”と称され、井戸ではないが、水を生活用水として利用している地区では、溜池を「井戸（かー）」と呼んでいる場合もある。
- 2) 「下^うり井^{がー}戸」と表記する場合もある。
- 3) 「樋^ひ川^{じゃー}井^{がー}戸」を“ふいーじゃーがー”、あるいは「樋^ひ川^{じゃー}」“ふいーじゃー”と発音する場合もある。以下、発音が若干異なる場合もあるが、ここでは一般的な発音に基づいている。

謝 辞

古井戸の位置に関する情報は、長嶺 操 氏から与えられ、さらに、いくつかの古井戸まで案内して頂いた。記して感謝の意を表する。

参考文献

- 藤本英夫・名嘉正八郎・創史社編（1980）『日本城郭体系』（第1巻 北海道 沖縄）. 233～349.（新人物往来社）
- 福島俊介（1987）『沖縄の石造文化』. 152p.（沖縄出版）
- 古家信平（1994）『火と水の民俗文化誌』. 269ページ.（吉川弘文館）
- 昌子住江・三沢博昭（1994）沖縄の石造井泉. 建設業界. 43（3）. 6～10.
- 小西泰次郎・木野義人・野間泰二・井上正文（1969）沖縄の水資源（1）（2）. 地質ニュース.（182）. 12～3343.（184）. 1～9.
- 長嶺 操（1992）『沖縄の水の文化誌』. 188p.（ポーターインク）
- 長嶺 操（1998）『沖縄の水の文化誌』. 263p.（沖縄村落史研究所）
- 玉城和信・長嶺 操（2003）『ふるさと糸満市再発見』. 236p.（はんこ西崎）
- 仲松弥秀（1978）『古層の村・沖縄民俗文化論』. 180p.（沖縄タイムズ社）
- 沖縄県（1994）『土地保全図』（一葉）.（国土庁土地局）
- 沖縄タイムズ社編（1983）『沖縄大百科事典』（全3巻）.（沖縄タイムズ社）

- 大井浩太郎『沖縄古代の水の信仰』. 164p. (沖縄文教出版社)
- 角田清美 (1993) 淵上の石積み井戸についての自然地理学的研究. 専修人文論集. (52). 109~133.
- 角田清美 (1994) 伊豆諸島の古井戸についての自然地理学的研究. 専修人文論集. (54). 109~143.
- 角田清美 (1996a) 武蔵野台地における鎌倉街道に沿う古井戸についての自然地理学的研究. 専修人文論集. (58). 63~112.
- 角田清美 (1996b) 井戸には覆屋根は設けられていたか. 専修人文論集. (59). 201~233.
- 角田清美 (1998) 古新聞の記事を地理の教材に利用する. 駒澤大学高等学校紀要. (20). 17~30.
- 角田清美 (2001a) 河越館の古井戸. 専修人文論集. (68). 173~205.
- 角田清美 (2001b) 城郭内の古井戸. 専修人文論集. (69). 173~197.
- 角田清美 (2002a) 武蔵野台地西端付近の下り井. 専修人文論集. (70). 297~370.
- 角田清美 (2002b) 武州御岳山の古井戸. 専修人文論集. (71). 157~171.
- 角田清美 (2013) 先島諸島の古井戸. 専修人文論集. (93). 1~28.
- 角田清美 (2014a) 首里城と周辺地域の古井戸. 専修人文論集. (94). 65~106.
- 角田清美 (2014b) 沖縄島中部地方の古井戸. 専修人文論集. (95). 65~106.
- 当間一郎 (1981) 『沖縄の井泉』. 114~139. (新星図書出版)
- 八重山探検隊 (2013) 古井戸の記憶. やいま. (239). 2~19.